

登熟を いただく

抜けるように澄んだ青空の下、野をわたる風がおじぎした稲穂たちを揺らします。青々とした苗から天に向かって登り行き、熟すほどに頭を垂れるその姿。黄金色に輝く一粒一粒にお日様の恵みがギョツと詰まっています。昔の人はそれを「登熟」と名付けました。食卓の上は、新米たちの晴れ舞台。お茶碗はごはんの晴れ着。ひとすくい、ひとすくいとよそつごとくに炊きたての香りが立ち上ります。ごはんを「よそつ」という言葉は「装っ」に通じます。装いをととのえることで、日々の身の熟しに感謝が映し出されてくるのです。そのいいねいな仕草から、思いやりが自然と溶け込んでいくよう。お茶碗の中の一粒子一粒に、温もりが行き渡っていきます。



2017年 10月 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15 16 17 18 19 20 21 22 23 24 25 26 27 28 29 30 31
11月 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15 16 17 18 19 20 21 22 23 24 25 26 27 28 29 30